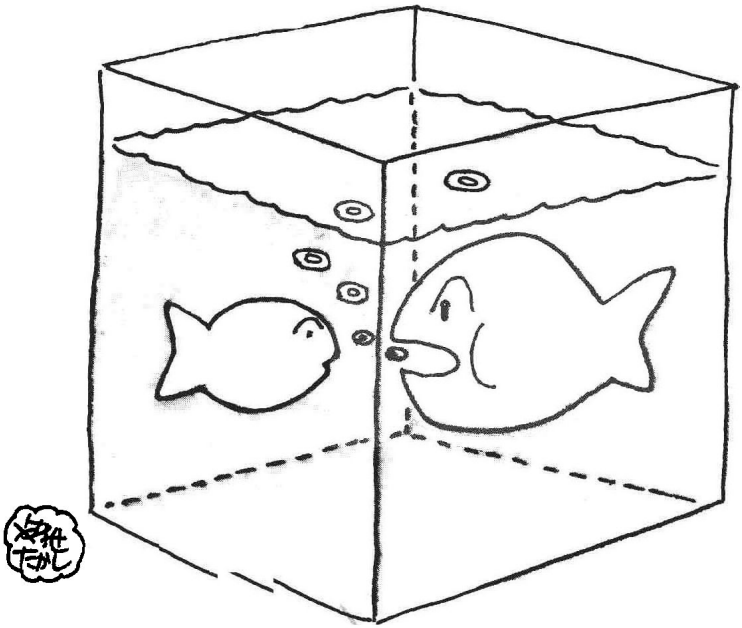
娘と私の時間

佐藤愛子



集英社

0095－772163－3041

◉

娘と私の時間

◉

定価 790円

©1978 A. SATO ◉ Printed in JAPAN

◉

1978年10月25日　初版発行
1978年11月30日　2版発行

◉

著　者　佐藤　愛子
発行者　堀内　末男
発行所　株式会社　集英社
〒101 東京都千代田区一ツ橋2－5－10
☎出版部　03－230－6361
　販売部　03－238－2781

印刷所　大日本印刷株式会社

落丁乱丁本は、おとりかえいたします。

テンの話……8
不マジメのすすめ……14
お正月の教訓……20
娘のとりえ……26
面白くないキモチ……34
宿題のお手伝い……42
花も実もあるお話……50
芸者志望……58
くたびれる日……66
筋皮ヒゲ右衛門……80

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

打ち込む……86
クッキー騒動……94
吸血鬼の教訓……100
躾のいろいろ……106
ああ、母性愛！……114
娘が役に立つとき……120
夏休みの過しかた……128
ヤケクソ同士……136
母親のせい……144
理想のムコ……150

気分ブチこわし……156
フラストレーション解消法……162
誕生日がめぐって来た……170
おもしろさについて……176
お正月の過しかた……184
ママ、もしも……192
つけメン作る夜……198
反省的教育論……204
一日シンガーソングライター……210
晴れの日が来たというのに……218

親のたのしみ……226
豪胆か鈍感か……234
個性的……240
娘との差……248
娘が沈黙するとき……254
大人物の器……260
◉響子より……269
◉響子へ……272

装幀・装画　やなせたかし
PHOTO　柿沼　隆
本文レイアウト　平　昌司

娘と私の時間

◉テンの話

この頃、我が娘はなぜか、勉強をよくするようになった。勉強をする娘の姿に馴染みのない母親である私は、

「どうしたの？」

とつい訊いてしまう。

勉強をしている子供に「どうしたの？」ときく母親というのは珍らしい、と我ながら思いつつ、

「テストなの？」

「ううん、ちがう」

「なら、どうして？」

「どうしてってことないでしょう」

娘はむっとしたように答える。

「ただ、勉強をしているだけよ」

「ふーん」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

と私は歎息のような唸りを洩らす。
——どうなっちゃってんだろう？
ふしぎでもあり気味悪くもある。
つまり、子供はこうして伸びるんですよ。人間、それぞれ伸びる時期というものがあって、人によってそれが十歳のときであったり、十五歳のときであったり、また二十歳のときであったりする。その伸びる時期をよく見ていて、そこでうんと伸びるように手を貸してやるのが教育というものではないですか。学校の先生は一律に勉強を教える。それが先生の仕事です。しかし母親は一律であってはならない。母親はもっと柔軟性をもって、伸縮自在に、緻密に子供の成長を観察していて、ここぞと思う時にうんと伸ばしてやる。まだ十分に機運が実っていないというあたりで、ヤイノヤイノとのべつまくなしに攻め立ててはダメです……なんてことを、私は得意げに人にしゃべる。
相手は感心して、
「すると、お嬢さんは今、その時が来たというわけですか？」
「そうかもしれませんね、教育というものは気長なものですよ。ハハハ」
悠然と笑ってみたりする。
しかし本当をいうと、今がその時なのかどうか、わからないのである。

そもそもこんなことが簡単にわかるわけがないのであって、潮の満干のように、高まったり引いたりして、人は成長して行くものなのだ。だが、したり顔に「つまり子供はこうして伸びるんですよ」などといったりするのが、三文もの書き稼業のハッタリ性で、そうとは知らぬ純真な人は、

「伸びる時と伸びないとき……ほんとうにそうなのねえ。それをじっと観察するのが親なんですねエ、あせらず、急がず、気長に見守る！　ほんとにいいお言葉をうかがいましたわ！」

と感激して首をふりふり帰って行く。

なに、ほんとうはこの親、気長なんじゃなくて、ノンキ者、面倒くさがり、教育不熱心だっただけのことなのだ。

しかし純真な人は感謝のあまり、その話をP・T・Aかなんかで披露し、

「それでねえ。佐藤愛子さんの娘さんも、劣等生でどうしようもなかったのが、ここんとこ、グングン伸びて来たんですって……」

「まあそうなの？　あのお嬢さんは勉強ギライだったんですってねえ。じゃあ、うちの子のことも、心配しなくてもいいかしら……」

と怠け者の子を持つ親は勇気づけられる。

私は人を勇気づけるのが大好きな人間である。だからこのような多少の

ハッタリをやっても許していただきたいのだ。

ところで、我が娘は勉強をやるようになってから、試験の点数を気にするようになった。昨日も学校から帰って来て、数学のテストが96点だったといって、しきりに歎いている。

「96点！　へえ！　いいじゃないのォ！」

私はびっくり仰天。96点で歎くなんて、こいつ、カマトトになりおったか。イヤミだぞ、と叱りたくなる。

「だって、100点の人、沢山いるのよォ、ああ、どうして私ってこんなにダメなんだろう。問題の解き方はわかっているのに、実につまらない計算違いをしているんだァ！　バカ、バカ、バカ」

自分の頭を殴っている。

「そんなこというけど、あんた、小学校の頃のこと思ってごらんよ。数学なんて20点とか30点とか。そうそう、5点ってのもあったんじゃなかった？」

「へんな慰めかたしないでよ」

5点、10点、なんて点を取ってもその頃、娘は悠々平然たるものであった。

「これなに？　10点満点？」
「いや、ちがう」
「50点満点？」
「いや、100点満点」
「へーえ」
　とこっちはキモをつぶして呆然。いっそ悠々たること山のごとき娘に感心したものである。
「うちの娘は大人物の片鱗がある」
　ヤケクソになってそういったりした。
　それが今、数学が96点だといって、己れの頭を殴っている。
「かつての大人物もタダの人になったか！」
　と私は感慨にふけらずにはいられない。
　そんな親の胸のうちも知らず、娘はボヤいている。
「あーあ、昔はよかったなァ、あの頃が懐かしい」
「何がよかったのよ？」
「勉強なんかぜんぜんしなかったから、テストの点が悪くても、勉強しなかったんだからしようがないや、と思ってたものね」
　ところが今は勉強している。勉強しているものだから、テストの点が悪

いと、あんなに勉強したのに、ああ何たることぞ、と口惜しさがこみ上げる。

「それはケチくさい根性です」

私はいった。

「ママなら、こう思うわね。あれだけ勉強したんだから、点数が悪くてもかまわない、とね。勉強は点をとるためにするのではないのだ！　自らを満し肥すためにするのです！」

俄かに演説調になる。

「点数が何だ！　点が怖くてゴマ煎餅が食えるか！」

「それ、どういうイミ？」

「ゴマ煎餅というのは、ゴマがテンテンになって入ってる」

「ああ、ゴマ煎餅が食べたいよウ、ママ！」

と娘は叫んで、96点の口惜しさを忘れたのであった。こういうところが、どうしても本格的優等生になれないゆえんである。

◉不マジメのすすめ

どういうわけか、この秋頃より急に勉強をするようになった娘が、私は不気味である。私が子供の頃、近所で有名な腕白小僧がいたが、その男の子がある時期から急におとなしくなった。するとその子のお母さんは頻りに心配して、熱を計ったりお医者さんへ連れていったり、何か悪い病気にでもかかったのではないかとうろたえていた。

今の私は丁度、そのお母さんと似たような心境で、いったい、どうなっちゃったんだろう？　と、そっと娘の顔色を窺ったりしている。

その娘がある日、いった。

「あーあ、こんなに一生懸命に勉強しても、カンニングする人の方がいい点なんだからいやんなっちゃうよぅ」

私は黙っている。私はこういうたぐいの話題はあまり好かないのだ。不平不満、人の悪口をいうのが嫌いというわけでは決してないが、威勢の悪い悪口や不平が嫌いなのだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com